

バランスの良い食事で
免疫力 UP! 毎日果物
200g食べましょう。

巻頭言

・就任ご挨拶

p1

第23回全国果樹技術・経営コンクール

p2

果樹を巡る動き

・関東・東海地域における
気候変動適応実践セミナー
(果樹編)について

p3

中央果実協会からのお知らせ

・令和3年度醸造用ぶどう
苗木の供給に関する調査報告書

p6

業務日誌、人事異動

p8

果物を食べて
応援しよう!

被災地を応援

巻頭言

就任ご挨拶

農林水産省農産局 果樹・茶グループ長 仙波 徹



1月に果樹・茶グループ長を拝命し、果樹振興に力を尽くすことになりました。これまで、果樹振興施策にご理解・ご協力をいただきました皆様におかれましては、これまで同様、ご支援・ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成29～30年度に園芸作物課で課長補佐として果樹振興施策にも携わった経験があります。その当時は九州北部豪雨、西日本豪雨、更に翌年令和元年の台風被害等、果樹産地を大きな災害が相次いで襲った時期であり、その当時の産地の皆様のご苦勞と復興のために今も続くご努力には、誠に頭の下がる思いです。

また、前職では農村振興局において鳥獣対策室長を務めておりましたが、中山間地での生産が多い果樹においては、まさに生産の維持自体が難しくなるまでの鳥獣被害に直面しており、生産者・産地関係者の方々から深刻な状況をなんとかして欲しいとお声を常にいただいておりました。

いずれにおきましても、当面する事態そのものに加えて、その背景となっている地域の経済と生活を支えている果樹産業の重要性を強く認識させられたところです。そのような認識の下、前々職、前職に引き続き、気を引き締めて職務に当たってまいります。

果樹生産は苗を植え、未収益期間も丁寧に管理を行い、実がなって経済生産が始まってからも十年単位で樹を育て管理していくため、その生産振興には他の品目以上に長期的な視点が求められると考えています。その観点から、足元の喫緊の課題は、我が国全体で進み、かつ地方、なかでも中山間地域においては何も手を打たなければ加速度的に進んでしまう高齢化と人口減少の中で、いかに次世代の担い手を確保していくか、だと考えています。

令和2年4月に策定した果樹農業振興基本方針においても、低下した供給力を回復するため生産基盤を強化する施策を進

めることを明記しており、令和3年度補正予算、令和4年度予算においても、

- ①労働生産性や収益性の向上のための省力樹形や優良品種の導入
 - ②スマート農業等、革新的な技術の開発と現場実装の加速
 - ③持続的な生産環境を整えるための苗木や花粉供給体制の整備
 - ④水田の活用や基盤整備によるモデル産地作りを進めるための早期成園化や経営の継続・発展に係る総合的な取組の実施
 - ⑤加工専用果実生産を進めるための省力化栽培技術や契約取引モデルの実証
- といった内容を盛り込み、産地の努力を支援する施策を充実しているところです。

一方で、施策の充実による環境整備を進めるとしても、最も重要なのはその環境の中で活躍してくれる担い手の確保・育成をいかに実現するかに結局は尽きます。

就任以来、コロナ禍で現地に直接伺うことはままならない状況ではありますが、リモート会議システムを使って、できるだけ多くの現場の方々の声を直接聞くように努力しております。その中で、同じ危機感を共有し、産地の大事な果樹産業を維持・発展させるため、一緒に地域で頑張る仲間を増やすために奮闘している方々がたくさんいらっしゃる事が改めて分かりました。特に産地を大事に想う若い生産者が諸先輩方の後押しを受けて、新しい取組に果敢に挑戦していることに、感銘を受けているところです。

日本の果物は世界一です。味も姿も芸術品だと思います。年々増加している果物の輸出額は、2021年には189億円となり、10年で2倍以上になりました。世界も評価しています。

こうした素晴らしい果樹産地をこれまで創ってきた先達に感謝し、次世代によりよい産地を引き継いでいけるよう、皆様方と協力して、行政担当者として全力で取り組んでいく考えです。

「第23回全国果樹技術・経営コンクール」

本コンクールは、果樹の生産技術や経営方式において他の模範となる先進的な農業者、生産集団等を表彰し、その成果を広く普及することにより、我が国果樹農業の発展に資することを目的として、平成11年度から毎年度開催し

ています。令和3年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、表彰式は中止しましたが、農林水産大臣賞、農林水産省農産局長賞、各主催団体賞が下記のとおり決定されました。

農林水産大臣賞受賞者の概要

第23回全国果樹技術・経営コンクール 受賞者一覧（順不同）

農林水産大臣賞

氏名・集団名	住所	
おおゆともみ 大湯知己	ひらかわし 青森県平川市	りんご
はやかわひろし はやかわ ひ さ こ 早川宏・早川比佐子	ふえふきし 山梨県笛吹市	ぶどう
すずきよしひろ すずき み ゆ き 鈴木義弘・鈴木美有紀	とよはしし 愛知県豊橋市	かき
J A フルーツ山梨 しのめししよ 東雲支所モモ部会	こうしゆえ 山梨県甲州市	もも

農林水産省農産局長賞

氏名・集団名	住所	
かすやのりとし かすやむねのぶ 糟屋訓敏・糟屋宗伸	しずおかし 静岡県静岡市	柑橘・いちじく
からとやすひろ からとみ ち こ 唐渡康裕・唐渡三千子	たかまつし 香川県高松市	温州みかん
ゆうげんかいしやし も こ ぼのうえん 有限会社下木場農園 やまぐち ひろし 山口 浩司	ながちやう 長崎県長与町	温州みかん・ 中晩柑
おがわなつお おがわあきこ 小川夏生・小川哲子	あまくさし 熊本県天草市	中晩柑類
きむらふさお 木村房雄	きつきし 大分県杵築市	ハウスみかん
かみい 上伊那農業協同組合 果樹部会梨専門部	いなし 長野県伊那市	なし

関係団体賞

【全国農業協同組合中央会会長賞】・【全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞】

氏名・集団名	住所	
せたこうじ 勢田幸治	いわでし 和歌山県岩出市	いちじく・ キウイ

【日本園芸農業協同組合連合会会長賞】

氏名・集団名	住所	
ばさきひでとし 馬崎英俊	ひのかげちやう 宮崎県日之影町	施設きんかん

【全国果樹研究連合会会長賞】

氏名・集団名	住所	
たかはしゆきひろ たかはし え み 高橋幸大・高橋枝美	ひたちし 茨城県日立市	ぶどう

りんご大規模省力栽培とカットりんごの加工販売による多角化経営 — 大湯 知己さん(青森県 平川市) (りんご)

りんご17haの栽培とカットりんご加工販売による雇用創出と産地維持に貢献

- りんご専作の大規模栽培で、1園地2～3haに団地化する計画的な規模拡大を進め、現在では7園地計17haの栽培面積を有する。その約8割がカットりんご向けで、摘果回数削減や着色管理の省略等徹底した省力栽培を実践するほか、更なる省力化を目指し、水田を造成して高密度わい化栽培を導入。
- 褐変防止・鮮度保持技術を開発し、カットりんごの製造・販売を全国展開するため「(株)アップルファクトリージャパン」を平成20年に設立し、さらに、加工原料の安定供給と効率的な栽培管理を実現するため、平成25年に生産部門の「(株)ファームあおもり」を設立した。
- こうした生産、製造・販売部門の法人化により地域雇用を創出しているほか、栽培が困難となったりんご園を集積することで、放任園の未然防止と産地の維持に貢献している。

雇用ゼロ夜業NGの家族経営でぶどうの長期連続出荷を実現 — 早川 宏さん・比佐子さん(山梨県 笛吹市) (ぶどう)

ぶどう80a(施設40a、露地40a)の家族経営

- 「種なしピオーネ」の4月出荷を可能とする超早期加温栽培において、収穫後の6月に再度剪定を行う「二度切り」や加温開始後に発芽や花穂形成を促す「高温・高湿度管理」、単収を向上させるための「炭酸ガス」の施用等の技術をいち早く取り入れ、連年栽培に成功し、地域の中心的な役割を担う。
- 加温ハウス栽培を経営の主力として、5～9月の長期間にわたり「シャインマスカット」中心にぶどうを出荷している。労働力は夫妻2人のみで、徹底した経営管理により「夜業はNG」としながらも収益性の高い経営を実現している。
- 自身が主導し組織した「ハウスぶどう研究会」において、栽培技術と経営管理の高度化に取り組み、現在は研究会員の加温ハウス11棟に環境モニタリングシステムを導入し、ハウスぶどうの高品質化と管理の省力化を進め、さらなる高収益化を目指す。

農林水産大臣賞受賞者の概要(続き)

ポット栽培の大苗育苗や低樹高栽培、作期分散により大規模化を実現 — 鈴木 義弘さん・美有紀さん(愛知県 豊橋市) (かき)**大正初期から百年続く大規模かき専作経営**

- 自園地に近く条件のよい放任園を借用し、園地を地域内5か所に集積しながら規模拡大を進めるとともに、自園地の古木の「次郎」を早生品種「早秋」や晩生品種「陽豊」等に改植し作期の分散を図ることで、収穫期間の労働力を平準化し、大規模かき専作経営を実現している。
- 家族労働力に加え、シルバー人材センターを活用して摘蕾・摘果作業と収穫作業の労働力を確保しており、高齢者でも安全かつ効率的に作業が行えるよう低樹高栽培や棚栽培を導入している。さらに、ポット栽培により育苗した大苗を定植することで、早期成園化を図っている。
- 地力向上や除草剤使用低減を目的に草生栽培を全園地で導入するとともに、剪定時に発生する枝をチップパーで粉碎してかき園に還元させている。
- 規格外品を用いて加工品を開発・製造し、百貨店などで販売している。

消費者ニーズに対応した高品質果実の安定供給体制の確立 — JAフルーツ山梨 東雲支所 モモ部会(山梨県甲州市) (もも)**徹底した品質向上対策とやまなしGAP等の導入による経営改善の推進**

- 市場関係者との積極的な情報共有により、早生種の「ちよひめ」から晩生種の「川中島白桃」まで9品種を6月下旬～8月中旬まで継続的に出荷するほか、市場や小売の需要を踏まえた荷姿で出荷する等、消費者ニーズに対応した供給が図られている。
- 地区毎の栽培技術講習会や品種毎の出荷目合せ会に加え、透過式光センサー選果機の導入により、各部会員の果実品質の結果(糖度、熟度、大きさ、着色など)を毎日フィードバックすることで適熟収穫の徹底と品質向上対策が図られ、高品質果実の生産・出荷を実現している。
- 全部会員がエコファーマー認定を受け、有袋栽培やフェロモントラップ調査による化学合成農薬の低減等を実践するほか、やまなしGAPの導入により、一人ひとりが適正な栽培管理や農薬管理、労働安全管理に積極的に取り組み、経営改善が図られている。

果樹を巡る動き**関東・東海地域における気候変動適応実践セミナー（果樹編）について**

農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課地球環境対策室 環境企画官 湯地 信也

1. はじめに

近年、農産物や水産物などの高温による生育障害や品質低下、観測記録を塗り替える高温、豪雨、大雪による大きな災害が、我が国の農林水産業・農山漁村の生産や生活の基盤を揺るがしかねない状況となっています。「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)は、本年2月に、気候変動の影響等に関する最新の科学的知見をとりまとめた第6次評価報告書を公表しました。本報告書では、「人為起源の気候変動は、極端現象の頻度と強度の増加に伴い、自然と人間に対して、広範囲にわたる悪影響とそれに関連した損失被害を、自然の気候変動の範囲を越えて引き起こしている」等と評価しています。

農林水産省は、昨年5月に、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現させるための新たな政策方針として「みどりの食料システム戦略」を策定し、災害や気候変動に強い持続的な食料システムの構

築を目指す取組を進めています。本戦略を踏まえ、昨年10月には「農林水産省気候変動適応計画」を改定し、気候変動に適応する生産安定技術・品種の開発・普及、将来予測に基づいた適応策の地域への展開等を推進しているところです。

本稿では、本年1月20日に開催された関東・東海地域における気候変動適応実践セミナー(果樹編)についてご紹介します。

2. 関東・東海地域における気候変動適応実践セミナー(果樹編)の概要

農林水産業は、気候変動の影響を受けやすい分野ですが、気候変動への適応策の実践により、気候変動による被害を軽減・回避すると同時に、気温の上昇による栽培地域の拡大、新品目の導入など将来の産地形成やブランド戦略に役立てることができます。また、我が国の国土は南北に長く、北は亜寒帯から南は亜熱帯までさまざ

まな気候区分があり、地域毎の多様な農林水産業が営まれていることから、適応策の実践にあたっては、地域毎の特徴を踏まえることが不可欠です。

このため、農林水産省では、令和元年度から農林漁業関係者、地方自治体の実務担当者等向けに、地域における気候変動適応実践セミナーを開催しています。令和3年度は、地域の関心が高い水稲、果樹及び水産業をテーマに、全国各地域において計5回開催しました。

関東・東海地域における果樹をテーマとしたセミナーは本年1月20日にweb開催し、全国の地方自治体(行政、試験研究、普及等)、農業団体、農業者など計60名の方々にご参加いただきました。セミナーでは、気候変動に適応する地域社会づくり、果樹の気候変動適応策の研究結果のほか、群馬県及び茨城県における適応策の取組として、りんごの果皮の着色不良、日焼け、凍霜害対策、日本なしの凍霜害対策、メッシュ農業気象データを活用した生育予測、新品種の導入等についてご講演いただき、果樹に対する気候変動の影響や適応策について理解を深めました。

その後、ご講演者間での気候変動適応の実践の課題と解決策をテーマにパネルディスカッションを行い、参加者全員で全体討議を行いました。生産現場における適応策の実践において、防霜ファン、多目的防災網の導入コストのほか、新品種の導入における経営リスク等の課題が提起されました。適応策の実践にあ

令和3年度関東・東海地域における気候変動適応実践セミナー(果樹編)

日時:令和4年1月20日(木曜日)13:30~17:00、場所:web

【プログラム】

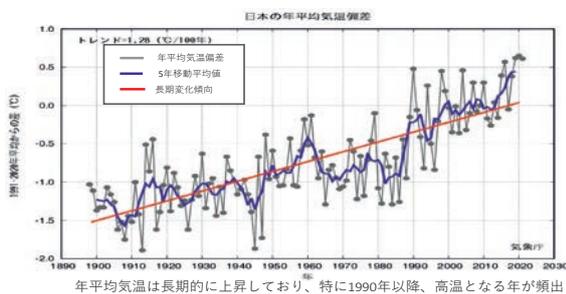
1. 開会 挨拶・趣旨説明
農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課
2. 話題提供
 - ① 気候変動リスクマネジメントの推進について
農林水産省農産局農業環境対策課
 - ② 気候変動適応策に関する研究成果
・地域における適応策の実践に向けて
東京都市大学 環境学部環境マネジメント学科 教授 馬場 健司
・果樹の気候変動適応策の研究成果
農研機構 果樹茶業研究部門 果樹生産研究領域 果樹スマート生産グループ
グループ長 補佐 杉浦 俊彦
 - ③ 自治体等における適応策の取組事例の紹介
・群馬県のリンゴ産地における気候変動適応策の取り組み
群馬県農業技術センター 中山間地園芸研究センター 上席研究員兼センター長 堀込 充
・茨城県の果樹栽培における気候変動の影響と適応策
茨城県農業総合センター 園芸研究所 果樹研究室 主任 加川 敬祐
 - ④ 気候変動の影響への適応に向けた将来展望とウェブ検索ツール
みずほリサーチ&テクノロジーズ
3. ディスカッション
4. 閉会

温暖化による気候変動・大規模自然災害の増加

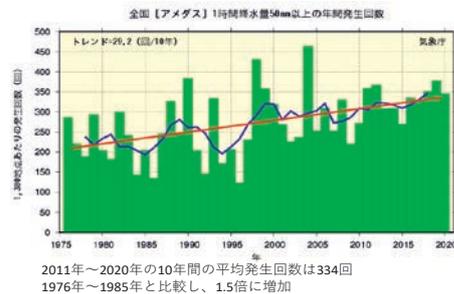


- 日本の年平均気温は、100年あたり1.28°Cの割合で上昇。
- 2020年の日本の年平均気温は、統計を開始した1898年に降最も高い値。(2021年は過去3番目に高い値)
- 農林水産業は気候変動の影響受けやすく、高温による品質低下などが既に発生。
- 降雨量の増加等により、災害の激甚化の傾向。農林水産分野でも被害が発生。

日本の年平均気温偏差の経年変化

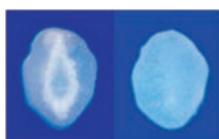


1時間降水量50mm以上の年間発生回数



農業分野への気候変動の影響

- ・水稲：高温による品質の低下
- ・りんご：成熟期の着色不良・着色遅延



白未熟粒(左)と正常粒(右)の断面



農業分野の被害



浸水したキュウリ
(令和元年8月の前線に伴う大雨)



被災したガラスハウス
(令和元年房総半島台風)

農林水産省気候変動適応計画の概要【果樹】



影響	<p><現状></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 柑橘での浮皮、生理落果 ○ りんごでの着色不良、日焼け、果実軟化 ○ 日本なしの発芽不良、もものみつづ、ぶどうの着色不良、柿の果実軟化等 ○ 一部地域で栽培適地が拡大している樹種あり 	<p><将来予測></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ うんしゅうみかん、りんごの栽培適地が移動 ○ ぶどう、もも、おうとう等は、高温による生育障害が発生 ○ 日本なしについて、低温要求量が高い品種の栽培が困難になる地域が広がる可能性 ○ 果樹の栽培が難しかった寒地では、果樹の栽培適地が拡大
	<p>りんごの着色不良 ぶどうの着色不良 日本なしの発芽不良 日本なしのみつづ</p> <p>うんしゅうみかんの浮皮 日本なしのみつづ</p>	<p>■ りんごの栽培適地の移動予測モデル</p> <p>1981-2000年 2046-2055年</p> <p>資料：農林水産省「気候変動の影響への適応に向けた将来展望」(2019)</p>

	適応技術の開発・普及	品種の開発・普及、品目転換
取組	<p>【高温対策】 (みかん)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 浮皮対策のため、カルシウム剤の活用等を推進 ○ 着色不良対策のため、フィガロン散布の普及を推進 ○ ジベレリン・プロヒドロジャスモン混用散布(浮皮対策)、遮光資材の積極的活用(日焼け対策)等による栽培管理技術の普及を推進 <p>(りんご)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 日焼け果・着色不良対策のため、かん水や反射シートの導入等を推進 ○ 着色不良・日焼け発生を減少させる栽培管理技術の普及を推進 <p>(ぶどう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 着色不良対策で、環状剥皮等の普及を推進 <p>(日本なし)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発芽不良を軽減させる技術対策の導入・普及を推進 <p>注：フィガロン、ジベレリン、プロヒドロジャスモンは植物成長調整剤</p>	<p>【高温対策】 (みかん)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 中晩柑への転換を図るため、改植等を推進 <p>(りんご)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「秋映」等の優良着色系品種の導入 ○ 標高差を活用した栽培実証、品種転換のための改植等の支援 <p>(ぶどう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「グロースクローネ」等の優良着色系品種や「シャインマスカット」等の黄緑系品種の導入を推進 <p>【品目横断】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 高温条件に適応する育種素材を開発するとともに、当該品種を育成 <p>【機会の活用】 (亜熱帯・熱帯果樹)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アテモヤ、アボカド、マンゴー、ライチ等の導入実証の取組を推進

気候変動がもたらす機会の活用の例



<p>ブラッドオレンジ (愛媛県)</p>		<p>愛媛県南予地域では、温暖化による影響や柑橘周年供給に向けて、平成15年頃よりブラッドオレンジ(「タロッコ」、「モロ」)の導入・普及に向けた取組を行い、着実な産地化が進められている。 (栽培面積(愛媛県) 平成20年:13.5ha → 平成30年:27.3ha)</p>
<p>もも (青森県)</p>		<p>青森県においてりんご栽培面積の7割を占める中南地域で、近年、ももの生産振興が図られており、高品質生産、産地ブランド化に向け、有望品種の検討や栽培技術の向上等の取組が行われている。 (栽培面積(青森県) 平成19年:91.4ha → 平成30年:122.2ha)</p>
<p>アボカド (愛媛県)</p>		<p>愛媛県松山市の島しょ部や海岸部において、平成20年頃よりアボカドの導入、普及が進められている。 (栽培面積(愛媛県) 平成30年:10.8ha)</p> <p>今後は、安定生産のための栽培技術を確立し、平成37年に10haまで栽培面積を拡大することを目標としている。</p>
<p>ヒノキ (山形県)</p>		<p>暖地型作物導入プロジェクトの一環として、これまで山形県では育成が困難であったヒノキ等新規樹木の植栽試験を実施し、成長経過や気象害、病虫害の発生等についてモニタリングを行い、温暖化適応樹種としての可能性を検討している。</p>
<p>アテモヤ (三重県)</p>		<p>三重県の温暖な気候を活かした亜熱帯果樹の特産品化を目指して、アテモヤの栽培適応性について検討し、優良品種の選定及び安定生産のための栽培技術を確立した。</p> <p>施設栽培が必須ではあるが、冬季は凍らない程度の加温で栽培可能であり、県内で生産に取り組んでいる。 (栽培面積(三重県) 令和2年:12a)</p>
<p>ブリ加工品 (北海道)</p>		<p>平成23年以降、北海道(函館港等)におけるブリの水揚量の増加を活用し、加工品の商品開発等に取り組んでいる。</p> <p>(ブリ[生鮮・加工品] 水揚量[北海道] 平成22年:2,190t → 令和元年:10,817t)</p>

っては、将来の気候変動に関するリスクマップの共有により、特に若手の生産者に危機感を持っていただいたといった取組事例が共有されました。

本セミナーの資料等は、以下の農林水産省ウェブサイトで公開しておりますので、ご参照ください。

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/climate/seminar/r3seminar.html>

3. おわりに

果樹は永年性作物であり、結果するまでに一定期間を要すること、また、需給バランスの崩れから価格の変動を招きやすいことから、他の作物にも増して、長期的視野に立って対策を講じていくことが不可欠です。

農林水産省気候変動適応計画では、うんしゅうみかんの浮皮果を軽減させるジベレリン・プロヒドロジャスモン混

用散布、りんごの着色不良や日焼け果を減少させるためのかん水や反射シートの導入、ぶどうの着色を改善させる環状剥皮の生産安定技術、日本なしの発芽不良被害を軽減するための発芽促進剤の利用等の普及に努めるとともに、うんしゅうみかんから中晩柑への品目転換、りんご・ぶどうの優良着色系品種への転換等の他、高付加価値な亜熱帯・熱帯果樹の導入に向けた実証等を推進することとしています。

全国の果実関係者の皆様方には、災害や気候変動に強い持続的な食料システムの構築に向け、果樹の気候変動適応の推進にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

中央果実協会からのお知らせ

令和3年度醸造用ぶどう苗木の供給に関する調査報告書

—情報部—

優良な果樹種苗の安定供給は果樹生産の維持・発展を図る上で欠かすことのできない基盤となるものです。醸造用ぶどう苗木については、国産ぶどうのみを原料とし日本国内で製造された「日本ワイン」の人気の高まりに伴い、醸造用ぶどうの需要が増加している中、急激な需要増加に対応するため、苗木の生産・供給体制の強化が課題となっています。

そこで、昨年度の醸造用ぶどう苗木の動向調査に引き続き、醸造用ぶどう生産者に対する個別調査等により課題等を整理するとともに、米国等主要生産国の状況を調査しました。また、醸造用ぶどう苗木の生産・供給体制の強化に向けた検討に資するよう、2年間の調査をもとに関係機関等へ情報提供を行いました。詳細は、ホームページをご覧ください。

国内の醸造用ぶどう生産に関する調査

国内で醸造用ぶどうを生産している事業者を対象に、経営や圃場の概要、シャルドネ(白用品種)、メルロ(赤用品種)、地域の代表的な品種等について、気象・土壌条件、栽培方法、ぶどうの生育状況、病虫害の発生状況、果実品質、品種評価等に関するアンケート調査を実施しました。

基準としたシャルドネ、メルロは、栽培面積が加工専用品種のなかで1、2位を占める品種で、北海道から九州まで幅広く栽培されています。特に、シャルドネは、多様な

気候条件でもある程度の品質を持ったワインができるとされ、世界各地で栽培されています。

気象条件と生育ステージ

メルロとシャルドネが栽培されている圃場の生育期(4月～10月)平均気温をみると、メルロは15～23℃、シャルドネは16～23℃となり、我が国では世界の産地に比べて温暖な地域を含め幅広い温度帯で栽培が行われていることを示しています。このことは、有効積算温度、クールナイトインデックスについても同様です。クールナイトインデックスは、9月の最低気温の平均で成熟期の夜温を表す指標で、15℃以上では着色不良や酸不足をもたらすとされています。生育期間の積算降水量は、地域差、年次差がありますが700～1,200mmです。

生育ステージ、病虫害の発生状況、果実品質は2019年から2021年の3か年について調査しましたが、いずれの年も平年気温より異常に高い年でした。

生育ステージは、北海道から九州まで気温差が大きく、地域による差が大きくなりました。シャルドネについては、萌芽は、九州が3月上旬で北海道が5月上旬、収穫は、九州が8月末で北海道が10月末から11月初めとなりました。メルロについては、萌芽は、九州が4月初旬で北海道が5月中旬、収穫は、九州が9月初旬で北海道が10月後半となりました。

表 1 品種ごとの総合評価

品種（白）		圃場数	評価平均	仕立て方	評価平均	品種（赤）		圃場数	評価平均	仕立て方	評価平均
シャルドネ	19	3.6	垣根	3.8	メルロ	17	3.2	垣根	3.3	棚	3.0
			棚	3.0				棚	3.0		
アルバリーニョ	6	3.9	垣根	4.0	ピノ・ノワール	9	3.0	垣根	3.3	棚	2.0
			棚	3.8				棚	2.0		
ソーヴィニヨン・ブラン	5	4.0	垣根	4.3	マスカット・ペーリーA	10	4.4	垣根	3.5	棚	4.0
			棚	3.0				棚	4.0		
甲州	3	4.3	垣根	4.3	シラー	1	4.0	垣根	4.0	棚	4.0
			棚	4.3				棚	4.0		
デラウェア	5	4.3	垣根	4.3							
			棚	4.3							
ケルナー	1	4.0	垣根	4.0							
			棚	4.0							
圃場の合計、評価平均		39	4.0	圃場の合計、評価平均		37	3.7				
全76圃場の評価平均		3.8									

生産者の品種総合評価

今回の調査における生産者の総合評価(5段階評価で5が最高)を平均すると、シャルドネ3.6、メルロ3.2となり、全体平均の3.8、白用品種平均の4.0、赤用品種平均の3.7に比べて低い評価となりました(表1)。ピノ・ノワールは人気が高い品種ですが、評価は3.0と最も低くなりました。アルバリーニョ3.9、ソーヴィニヨン・ブランとシラーは4.0となり、比較的高い評価となりました。

シャルドネ、メルロは、成熟期に夜温の高い地域では酸の低下がみられました。シャルドネでは晩腐病が多くなっている、メルロでは耐病性が弱いとのコメントが出ています。両品種を含め、多くの品種でなんらかの雨除けを採用しています。

一方、マスカット・ペーリーA、甲州、デラウェアのような生食兼用種の評価が4.3~4.4となり、醸造用専用種より高くなりました。この評価が、栽培のしやすさ、収量の安定性を含めた総合評価なのか、果実品質の評価なのか、さらに確認する必要があります。

今後、どのような品種がよいのか、気候変動の影響、海外の動向等を踏まえさらに検討していく必要があります。

米国カリフォルニア州と日本の醸造用ぶどう苗木の供給体制の比較

醸造用ぶどう栽培は気象の影響を受けやすく、近年の温暖化の進行や異常降水の頻発等にも対応していく必要があります。

海外では、気候変動にも対応した取組が行われ好適品種やクローン(同じ品種でも性質の異なるもの)の選定も行われています。こうした情報収集を進めるとともに、今後の気候変動も考慮しながら、品種やクローンの導入

を進めることが求められています。品種導入に際しては、特に、耐病性、豊産性、暖かい気候での栽培適性を有していることが条件となります。

カリフォルニアの苗木の供給体制

苗木商等から提供される苗木については、品種が確かです。ここでは、カリフォルニアのFPS(Foundation Plant Services)の取組を紹介します。FPSはぶどうや果樹等の原木に係るサービスを行う公的機関です。

植物検疫を経て海外から輸入したサンプル、国内ぶどう園から収集したサンプルは、FPSの原木園(G1)に入ります(図1)。ここで栽培されるのは、すべての既知のウイルス等の病原体に対して陰性の穂木・台木です。ここでは、定期的にウイルス検査が行われます。

その後FPS内で増殖され、苗木商の登録済み母樹増殖ブロック(G2)に入り、農家やワイナリーに供給される苗の増殖用となります。そこから苗木が作られ認証苗となります。このようにしてウイルス被害を軽減する仕組みが作られています。

日本では、アメリカのFPSやフランスのIFVのように公的な立場で、海外から輸入、あるいは国内からの入手によって、ぶどう樹の植物資源を管理する機関はなく、図1のG1の部分がない状態です。また、将来を見据えて自主的に品種、クローンを輸入しようとする苗木商は少ないのが現状で、個人輸入が多いのではと考えられます。

穂木の違法な輸入が行われたり、ウイルス検査が不十分な苗が増殖されると、ウイルス、病害虫の侵入や拡大を引き起こすリスクがあります。

(公財)中央果実協会

編集・発行所
公益財団法人 中央果実協会
〒107-0052
東京都港区赤坂 1-9-13
三会堂ビル 2F
電話：03-3586-1381
FAX：03-5570-1852

編集・発行人
今井 良伸
印刷・製本
(有) 曙光印刷



Web サイト
URL:
www.japanfruit.jp

お知らせ

毎日くだもの 200 グラム運動
メールマガジン「くだもの & 健康ニュース」を発刊しています。

多くの方の読者登録をお待ちしております。

メルマガの読者登録方法は
当協会下記ホームページをご覧下さい。

<https://www.japanfruit.jp>

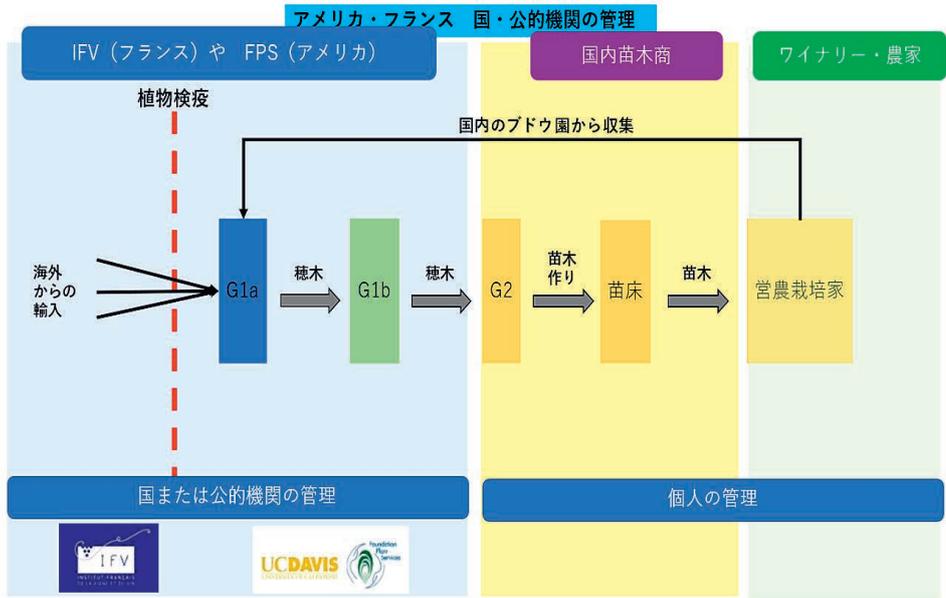


図 1 カリフォルニアの苗木供給体制

こうした状況を打破するためには、将来の気候変動や社会情勢に即した品種、クローンを選び、輸入し、日本独自の原木園 (G1) を構築することが必要になります。

醸造用ぶどう苗木の生産・供給体制の強化に向けた情報提供

令和2年度、3年度の調査結果をもとに、醸造用ぶどう苗木生産の課題と今後の取組に関するオンラインセミナーを12月24日に開催しました。国内の苗木生産の現状と課題、ウイルス病の特徴、カリフ

フォルニア州の苗木供給体制等について詳しい報告があり、討論が行われました。

本セミナーの動画は、当分の間、調査委託先である(一社)日本ワインブドウ栽培協会ホームページにて公開しています。

<https://www.jvine.or.jp/20211224>

業務日誌、人事異動

- 4. 2. 14 果樹農業生産構造分析調査検討委員会 (第3回) (リモート開催)
- 4. 2. 17 第23回全国果樹技術・経営コンクール表彰 (表彰式中止)
- 4. 2. 24 令和3年果樹経営支援対策事業等事業実施評価委員会 (第2回) (リモート開催)
- 4. 3. 4 令和3年度第3回理事会 (於三会堂ビル及びリモート開催)
- 4. 3. 8 全国果実生産出荷安定協議会第4回かんきつ部会 (リモート開催)
- 4. 3. 23 令和3年度臨時評議員会 (書面決議)

道果基金協会

区分	新役職	日付	名前	旧役職
退任		4. 2. 1	池下 荘	宮崎県協会事務局長
就任	宮崎県協会事務局長	4. 2. 1	広瀬 誠博	
退任		4. 3. 14	根津 彰寛	長野県協会副幹事長
就任	長野県協会副幹事長	4. 3. 14	山岸 順一	
退任		4. 3. 14	外谷 昌幸	長野県協会事務局長
就任	長野県協会事務局長	4. 3. 14	近藤 亨	